

高槻市

# 磐 手 杜 古 墳 群

近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（補助車線事業）と主要地方道伏見柳谷高槻線  
バイパス（仮称 高槻東道路）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年1月

公益財団法人 大阪府文化財センター



高槻市

# 磐 手 杜 古 墳 群

近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（補助車線事業）と主要地方道伏見柳谷高槻線  
バイパス（仮称 高槻東道路）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



# 序 文

大阪府の北東部、京都と大阪の中間に位置する高槻市は、古来より淀川や街道を介して多くの物資と人が行き交う要衝の地にあつて、市内には多様な文化遺産が数多く残されています。

高槻市東部には標高 274 m の安満山を主峰とする山塊が三島平野に迫り、山裾に沿つて東西に西国街道（古代山陽道）が通り、街道沿いには市域最古の寺院である梶原寺跡（僧寺・尼寺）をはじめ、造東大寺司の求めに応じて瓦を生産した梶原瓦窯跡や大原駅（梶原南遺跡）などの公的性格を有する遺跡が並びます。南麓斜面には、我国でも最古級の安満宮山古墳や、安満山古墳群、梶原古墳群などの古墳群が築かれています。

今回の調査では、灰釉陶器長頸壺を蔵骨器とし石組を伴う平安時代の火葬墓の一部が発見されました。安満山麓では梶原古墳群中の須恵器四耳壺を蔵骨器とする火葬墓に次いで二例目で、石組をともなうものとしては初めての事例で、貴重な発見といえます。

調査を実施するにあたり、多大なご協力とご配慮をいただいた地元関係者の方々をはじめ、高槻市教育委員会、大阪府教育委員会、大阪府茨木土木事務所、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所に対し、深く感謝します。

平成 28 年 1 月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 田邊 征夫



# 例 言

1. 本書は、高槻市下地内に所在する、磐手杜古墳群の発掘調査報告書である。調査名は磐手杜古墳群 13-1 と磐手杜古墳群 13-2 である。
2. 公益財団法人大阪府文化財センターは、平成 26 年 1 月 30 日付けで、西日本高速道路株式会社関西支社新名神所ならびに大阪西事務所大阪府茨木土木事務と「近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（補助車線事業）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（仮称 高槻東道路）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査（その 2）」として委託契約を締結し、平成 26 年 2 月 3 日から平成 26 年 3 月 31 日までの間に現地調査を行った。
3. 遺物整理は、平成 27 年 9 月 24 日付けで、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所ならびに大阪府茨木土木事務所と「近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（補助車線事業）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（仮称 高槻東道路）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査遺物整理」として委託契約を締結し、平成 27 年 10 月 1 日から平成 27 年 10 月 31 日までの間に中部調査事務所で行い、平成 28 年 1 月 29 日に本書の刊行をもって全ての事業を終了した。
4. 現地調査と遺物整理は、以下の体制で実施した。  
平成 25 年度 現地調査  
事務局次長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史 調査課長 岡戸哲紀 第一課長補佐 金光正裕  
専門調査員 松本吉弘  
平成 27 年度 遺物整理  
事務局次長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史 調査課長 岡戸哲紀 課長補佐 金光正裕  
専門員 片山彰一（写真室）
5. 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影し、遺物写真は写真室が担当した。出土人骨については、大阪市立大学大学院医学研究科助教安部みき子氏から貴重なご教示を得た。
6. 発掘調査ならびに遺物整理の実施にあたっては、地元自治会、高槻市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとして、下記の方々にご指導ご協力を賜った。  
岡本敏行（大阪府教育委員会） 高橋公一（高槻市立今城塚古代歴史館）
7. 本書の作成にあたっては、金光が執筆・編集した。
8. 本調査に関わる写真・実測図などの記録は、公益財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 現地調査および整理作業は、公益財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル 2010』に則って行った。
2. 測量は、世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系に基づき実施した。本書に記載した座標値の単位は全てmで、単位は省略した。
3. 水準は、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。標高は全て T.P. からのプラス値である。記載にあたっては T.P. + m を省略した。
4. 方位北は、平面直角座標系第VI系の座標北を示す。座標北は、真北に対して  $0^{\circ} 12' 28.5''$  東に、磁北に対して  $7^{\circ} 29' 28.5''$  東に振っている。
5. 調査で使用した土色については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。記載は、記号・色・質の順とした。
6. 土壌の粒径区分と土質区分については、ウェントウオースの分類基準に従った。



# 目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

第1章	調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節	調査に至る経緯と経過	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の経過（調査日誌録）	4
第2章	調査の成果	5
第1節	地理的・歴史的環境	5
1.	地理的環境	5
2.	歴史的環境	6
第2節	調査の方法	11
1.	現地調査	11
2.	整理作業	14
第3節	遺構と遺物	15
1.	基本層序	15
2.	遺構と遺物	18
第3章	まとめ	23
1.	火葬墓	23
2.	古墳	23
3.	その他	23

# 挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1/25000）	1
図2	周辺の遺跡（1/50000）	6
図3	磐手杜古墳群とその周辺（1/10000）	11
図4	調査区位置図（1/5000）	12
図5	地区割の基準	12
図6	地区割図（1/400）	13
図7	土層断面図（1/100）	16
図8	全体図（1/200）	19
図9	石組検出状況（1/40）	20
図10	出土遺物実測図（1/3）	22

# 挿入写真目次

写真1 調査前現況（北東から）

写真3 包含層掘削状況

写真2 表土層掘削状況

写真4 大阪府教育委員会 現地立会

# 写真図版目次

## 巻頭図版

1. 調査地遠景（南東から）
2. 蔵骨器出土状況（南西から）

## 図版1 遺跡

1. 磐手杜古墳群遠景（西から）
2. 安満山上空より三島平野と淀川を望む（北から）

## 図版2 遺構

3. 東半部着手前現況（南西から）
4. 東半部着手前現況（西から）
5. 西半部着手前現況（東から）
6. 西半部着手前現況（南東から）
7. 蔵骨器出土状況（西から）
8. 東側石組検出状況（北東から）
9. 石組検出状況（北から）
10. 北壁断面（中央・東側石組付近）（南から）

## 図版3 遺構

11. 北壁断面（中央）（南から）
12. 北壁断面（中央・西側石組付近）（南から）
13. 石組全景（西から）
14. 中央部南北断面（西から）
15. 北壁断面（西端1）（南から）
16. 北壁断面（西端2）（南から）
17. 北壁断面（東端1）（南から）
18. 西壁断面（東から）

## 図版4 遺構・遺物

19. 西半部全景（東から）
20. 東半部全景（西から）
21. 中央石組付近全景（西から）
22. 東半部全景（北東から）
1. 灰釉陶器長頸壺（蔵骨器）
2. 須恵器坏身
6. 弥生土器壺底部



高槻市梶原・安満・成合地区で進められている主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（仮称 高槻東道路）建設もその一つである。高槻東道路は、高槻市梶原六丁目付近で都市計画道路十三高槻線と分岐して北上し、国道 171 号・阪急京都線・JR 東海道線・名神高速道路を越えて、名神高速道路の北側を拡幅して西に進み、新名神高速道路高槻 I C で合流する総延長約 3.3 km のアクセス道路である。新名神高速道路と接続することで、北摂地域の交通の利便性を向上させ、「中部圏、首都圏と大阪府域との連携を強化、北摂地域の街づくり、活性化に寄与する」役割を担っている。

北摂山地を横断する新名神高速道路はその大半がトンネル工法であるが、高槻・茨木・箕面の各市域には、府道などとアクセスする大規模な I C が計画されており、各予定地には成合遺跡（高槻市）やキリシタンの墓碑が発見された隠れキリシタンの里（茨木市）や止々呂美城跡（箕面市）などが周知されていた。西日本高速道路株式会社関西支社は、平成 21 年 4 月 27 日付けで、大阪府教育委員会に対して、これら埋蔵文化財の試掘・確認調査を依頼、大阪府教育委員会は、同年 5 月 13 日付けで回答するとともに、同年 8 月 25 日付けで、財団法人大阪府文化財センターに対して、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査について（通知）」において、成合遺跡と止々呂美城跡他の新名神高速道路（高槻～箕面）建設工事に伴う発掘調査を実施するよう指示した。平成 21 年 8 月、大阪府教育委員会、西日本高速道路株式会社関西支社、財団法人大阪府文化財センターは、「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、平成 22 年度から発掘調査に着手し、その後高槻～箕面間の全域を対象として、発掘調査を本格的に展開した。

また、大阪府都市整備部は、平成 25 年 9 月 10 日付けで、新名神関連事業として、茨木北 I C と高槻 I C の両アクセス関連 2 か所の埋蔵文化財の発掘調査を大阪府教育委員会に依頼、同年 9 月 12 日付けで、大阪府都市整備部に回答するとともに公益財団法人大阪府文化財センター（以下、「大阪府文化財センター」）に対して茨城北 I C と高槻 I C アクセス関連区間の調査を実施するよう通知、平成 25 年 9 月 18 日、大阪府教育委員会と大阪府都市整備部と大阪府文化財センターは、茨木北と高槻両 I C アクセス関連区間の調査について、「新名神関連事業に伴う埋蔵文化財調査の実施についての覚書」を締結した。

高槻市域では、平成 22 年度、成合・宮ヶ谷地区と萩之庄一丁目・二丁目地区の 2 ケ所で調査が開始された。平成 22 年 8 月～同 23 年 2 月には、「成合・宮ヶ谷地区確認調査 10 - 1」として、幅 2.0 m のトレンチ計 22 ケ所の調査が行われ、名刹金龍寺の堂宇石垣などが残る字「内供谷」の山麓に広がる棚田水田から平安時代から中世の遺跡が発見され、金龍寺旧境内跡として登録された。金龍寺旧境内跡については、平成 23 年 6 月～10 月までの間、「金龍寺旧境内跡 11 - 1」として発掘調査が行われた。

また、萩之庄一丁目・二丁目地区では、阪急京都線から市道 67 号（西国街道）までの区間、南北約 300 m、東西約 250 m を対象として、安満遺跡隣接地（確認）10 - 1 として行われ、JR 東海道線南側において弥生時代から平安時代の遺跡が発見され、萩之庄南遺跡として登録された。萩之庄南遺跡については、「主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路梶原工区）工事用進入路工事」に伴う調査として、平成 24 年 1 月～6 月までの間、「萩之庄南遺跡 12 - 1」として発掘調査が行われた。

平成 23 年度には、弥生時代中期の高地性集落として周知されていた成合遺跡でも調査が開始された。

調査の進展に伴い、古墳時代後期の古墳や平安時代の須恵器窯跡をはじめとして新たな遺構・遺物が発見されるとともに遺跡の範囲が従来よりも大きく広がることが明らかにされた。また、金龍寺旧境内跡と成合遺跡の間の丘陵上で行われた試掘調査では、古墳時代後期の古墳や古代の遺構・遺物が発見さ

れたため金龍寺旧境内跡の範囲は西側に大きく広がり、両遺跡は細い谷筋を挟んで接するまでに拡大することとなった。古墳時代後期の円墳は、新規発見の遺跡として成合1号墳と登録され、平成24年6月～9月の間、発掘調査が行われた。

さらに、成合遺跡の調査では、弥生時代中期の集落の具体的な様子が明らかになったほか、新たに平安時代前期の須恵器窯跡1基や古墳時代後期の横穴式石室が発見され、前者は「成合西王寺山窯跡」、後者は「成合西王寺山古墳群」と命名された。

(仮称)高槻東道路計画路線の梶原工区(0.8km)のうち、国道171号から市道67号(西国街道)までの約0.6kmを対象として、平成25年4月1日付けで、「主要地方道伏見柳谷高槻線(高槻東道路 梶原工区)建設並びに主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査業務委託」として、大阪府茨木土木事務所と委託契約を交わし、平成25年4月～7月までの間、「梶原寺跡隣接地(確認)13-1」として、一辺2.0mのグリッド計20ヶ所の確認調査を行った。その結果、JR東海道線南側から阪急京都線南側直近までの区間で、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が検出されたことから、新規発見の遺跡として、梶原西遺跡として登録された。梶原西遺跡については、平成26年1月6日付けで、「主要地方道伏見柳谷高槻線(高槻東道路 梶原工区)道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託」として、大阪府茨木土木事務所と契約し、「梶原西遺跡13-1」として、平成26年1月から発掘調査に着手した。調査の結果、古代や古墳時代の溝や土坑群のほか、弥生時代中期の方形周溝墓群などが検出された。

名神高速道路を越えてから西側、高槻第一JCT手前までの側道区間約1.4kmの安満山山麓部は、名神高速道路拡幅工事の際に大きくカットされていたが、周知の遺跡として梶原古墳群や磐手杜古墳群の範囲に含まれており、樹木や下草を伐採後の表面調査においても、なお、古墳が存在している可能性が考えられたことから、大阪府教育委員会は、平成25年10月2日付けで、財団法人大阪府文化財センターに対して、「平成21年8月25日付通知」の追加措置として、近畿自動車道名古屋神戸線新設事業(補助車線事業)に伴う磐手杜古墳群・梶原古墳群他の発掘調査を行うよう通知した。

これを受けて財団法人大阪府文化財センターでは、磐手杜古墳群の範囲を含む安満御所の町・下地内の西側約100mの区間を対象として試掘・確認調査を行うこととなった。平成25年10月31日付けで、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所ならびに大阪府茨木土木事務所と、「近畿自動車道名古屋神戸線新設事業(補助車線事業)と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス(仮称 高槻東道路)事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査」として委託契約を交わし、平成25年11月～12月までの間、磐手杜古墳群隣接地13-1として、幅2.0mのトレンチ6ヶ所の調査を行った。調査の結果、磐手杜古墳群に隣接する調査区から、6世紀後半の須恵器坏身や平安時代前半の灰釉陶器長頸壺と石組遺構が検出されたことから、磐手杜古墳群の範囲がさらに東へ広がり、古代の遺構・遺物も存在する可能性が高いことが明らかとなり、高槻市教育委員会によって、磐手杜古墳群の範囲がさらに東側に拡大された。

この結果を受けて、大阪府文化財センターは、平成26年1月30日付けで、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所ならびに大阪府茨木土木事務所と、「近畿自動車道名古屋神戸線新設事業(補助車線事業)と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス(仮称 高槻東道路)事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査(その2)」として委託契約を交わし、「磐手杜古墳群13-2」として、平成26年2月3日～平成26年3月31日までの間、発掘調査を行った。

## 2. 調査の経過

(調査日誌抄録)

- 平成 26 年 2 月 3 日 (月) 現地において事業者立ち会いのもと、調査範囲の確認を行った。
- 平成 26 年 2 月 4 日 (火) 調査関連資料の収集、調査計画の策定。安全柵の設置などの準備作業。
- 平成 26 年 2 月 12 日 (水) 土砂転落防止柵設置などの準備工事終了後、表土掘削に着手した。
- 平成 26 年 2 月 17 日 (月) 調査区北壁断面確認。人力掘削開始。
- 平成 26 年 2 月 28 日 (金) 西側第 1 面精査・全景写真撮影。
- 平成 26 年 3 月 10 日 (月) 試掘調査で検出した石組みの西側平坦部からも石組遺構を検出した。  
北壁断面実測図作成。
- 平成 26 年 3 月 14 日 (金) 石組検出状況写真・図面作成。調査区中央アゼ断面図作成。
- 平成 26 年 3 月 18 日 (火) 石組出土状況図作成。
- 平成 26 年 3 月 25 日 (火) 最終面で航空測量を実施し、また、大阪府教育委員会の立会を受けた。
- 平成 26 年 3 月 28 日 (水) 大阪府教育委員会の指示により、石組遺構に関連する断面等について再度検討を行い、全ての現地調査を終了した。
- 平成 26 年 3 月 31 日 (月) 中部調査事務所にて図面・写真のチェックや登録作業を行った。

### 【新名神高速道路と関連する主要地方道路関係発掘調査報告書一覧】

- |                |  |                            |
|----------------|--|----------------------------|
| 大阪府教育委員会       | 2011 年「金龍寺旧境内跡 (10087)」  | 大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 15      |
| (公財)大阪府文化財センター | 2012 年「金龍寺旧境内跡」  | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 230 集 |
| 大阪府教育委員会       | 2012 年「成合遺跡 (11057)」・「千提寺西遺跡・千提寺南遺跡・日奈戸遺跡 (11076)」   | 大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 16      |
| 大阪府教育委員会       | 2012 年「金龍寺旧境内跡 (12081)」・「千提寺市阪遺跡・千提寺クルス山遺跡 (12082)」・<br>「成合地獄谷遺跡 (12083)」・「萩之庄南遺跡 (12084)」 | 大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 17      |
| (公財)大阪府文化財センター | 2013 年「成合 1 号墳」  | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 234 集 |
| (公財)大阪府文化財センター | 2013 年「萩之庄南遺跡」   | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 237 集 |
| (公財)大阪府文化財センター | 2014 年「千提寺南遺跡」   | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 245 集 |
| (公財)大阪府文化財センター | 2014 年「止々呂美城跡」   | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 246 集 |
| (公財)大阪府文化財センター | 2014 年「成合遺跡・金龍寺旧境内跡 2」   | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 251 集 |
| 大阪府教育委員会       | 2014 年「梶原西遺跡 (13030)」・「梶原古墳群・磐手杜古墳群 (13008)」   | 大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 18      |
| (公財)大阪府文化財センター | 2015 年「千提寺西遺跡・日奈戸遺跡・千提寺市阪遺跡・千提寺クルス山遺跡」   | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 256 集 |
| (公財)大阪府文化財センター | 2015 年「梶原古墳群」  | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 259 集 |
| (公財)大阪府文化財センター | 2015 年「成合地獄谷遺跡・成合遺跡 2・金龍寺旧境内跡 3」   | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 260 集 |
| (公財)大阪府文化財センター | 2015 年「梶原西遺跡」  | (公財)大阪府文化財センター調査報告書第 261 集 |

## 第2章 調査の成果

### 第1節 地理的・歴史的環境

#### 1. 地理的環境

大阪府の北東部に位置する高槻市は、京都と大阪の二大都市のほぼ中間にあり、古来より山陽道（西国街道）や国道1号、JR東海道線や阪急京都線などの陸運や木津川・桂川・宇治川を集めて瀬戸内海に注ぐ淀川などの水運を介して多くの文物が行き交い、交通の要衝の地として発展してきた。戦後は、丘陵部や沖積地において大規模な宅地化や市街化が急速に進んで人工改変地形が広がる一方、北に連なる山間部には摂津峡に代表される自然豊かな景勝地が残され、休日ともなると多くの人々が訪れている。

こうした高槻市の地形は、丹波高地の南東端を占め標高678.9mのポンポン山を最高峰とする標高300～600mの山々が連なる北摂山地東部、その南側に続き主に大阪層群を基盤とする標高30～200mの高槻・南平台・奈佐原の各丘陵、丘陵から南へ舌状に張出し「藍野」と呼ばれた標高10～30mの富田台地からなる北半と、淀川低地の北東部を占め標高10m以下の沖積平野が広がる南半とに大きく二分され、枚方市との市境を淀川が流れる。

山地や丘陵地には、檜尾川・芥川・女瀬川とその支流によって多くの開析谷が刻まれ、田能盆地・原盆地・成合谷・服部谷などの谷底平野が形成され、丘陵南端部には、西から標高281.1mの阿武山、274.2mの安満山、270.4mの天王山が聳える。西半の富田台地縁辺部には扇状地が発達しているのに対して、檜尾川より東側の扇状地は、丘陵裾部にわずかに形成される程度であまり発達しない。丘陵の南斜面は総じて急峻で沖積平野に迫り、京都府大山崎あたりの平野部は淀川まで約1km前後と狭くなっている。沖積平野は、扇状地・後背湿地・自然堤防などが繰り返し形成され、また、天井川化した檜尾川などが淀川に向かって流れ、複雑な地形変化をとげている。

磐手杜古墳群が立地する安満山の南側斜面は、萩之庄川など、流路が短く勾配が急な河川によって大小の谷が多く刻まれる。標高100～150m付近の丘陵尾根は細く、尾根の東西両斜面は急峻な地形となるのに対して、標高50m前後の丘陵斜面は、傾斜も緩やかとなり、竹林や畑地として開墾された平坦地が見られる。また、紅苺山丘陵との狭隘部を抜けた檜尾川は、磐手杜古墳群が立地する尾根に沿って東流し、東の法照寺付近で南に折れて真っ直ぐ流れる。天井川化した檜尾川の堤防と水田面とは約3m近い高低差が見られる。一方、安満山の山裾には、比較的新しい時期の人工改変地形と思われる高さ2～3m前後の崖や、山麓の斜面崩壊や安満山から流下した河川によって形成された幅の狭い扇状地による起伏のある地形が形成される。ここには古い集落が立地しており、山裾沿いに旧西国街道と推定される市道67号が通っている。また、南に広がる沖積低地は、氾濫平野とその南東側に広がる後背湿地と淀川沿いの淀川高水敷に地形区分され、氾濫平野や後背湿地には、安満山からの中小河川によって小規模な自然堤防が形成され、放棄された淀川支流などが名残池・沼として点在している。また、淀川高水敷とその周辺の荒地は、平安時代に多くの牧（放牧地）が置かれた。

## 2. 歴史的環境

**旧石器時代から縄文時代** 旧石器時代の遺跡は、女瀬川流域の南平台丘陵や奈佐原丘陵の南端から富田台地とその縁辺の扇状地上に立地する。郡家川西遺跡、郡家本町遺跡、津之江南遺跡からは後期旧石器時代の礫群やナイフ形石器、搔器、舟底形石器などが出土している。このうち、郡家今城遺跡C地点からは、瀬戸内技法によるナイフ形石器を主体とする国府文化期の良好な石器や礫群が、塚原遺跡からは



- 1 磐手杜古墳群 2 桜井御所跡 3 越谷遺跡 4 神内古墳群 5 源吾山遺跡 6 神内遺跡 7 梶原遺跡 8 梶原南遺跡 9 上牧遺跡 10 井尻遺跡 11 梶原経塚 12 梶原古墳群 13 梶原北遺跡 14 梶原瓦窯跡 15 梶原寺跡 16 丸山古墳群 17 萩之庄瓦窯跡 18 梶原西遺跡 19 萩之庄南遺跡 20 成合地獄谷遺跡 21 悉檀寺跡 22 成合遺跡 23 金龍寺旧境内跡 24 金龍寺跡 25 成合1号墳 26 安満山古墳群 27 安満宮山古墳 28 萩之庄古墳群 29 萩之庄遺跡 30 法照寺古墳 31 法照寺遺跡・窯跡 32 成合琴堂窯跡 33 芥川山城跡 34 帯仕山向城跡 35 塚脇古墳群 36 渋谷古墳 37 安岡寺古墳 38 宮之川原遺跡 39 大蔵司遺跡 40 真上遺跡 41 真上古墳群 42 真上東遺跡 43 真上安祥寺古墳 44 古曾部・芝谷遺跡 45 奥天神町遺跡 46 羅王山古墳 47 慈願寺山遺跡 48 真上古墳 49 慈願寺山1号墳 50 慈願寺山古墳群 51 石川年足墓 52 天神山遺跡 53 中將軍塚古墳 54 宿禰塚古墳 55 昼神車塚古墳 56 芥川遺跡 57 紅草山遺跡・紅草山古墳群 58 奥坂古墳群 59 紅草山南遺跡 60 安満北遺跡 61 安満遺跡 62 古曾部南遺跡 63 上田部遺跡 64 高槻城 65 萩谷銅鉾山跡 66 霊山寺 67 塚脇古墳群(西群) 68 塚脇古墳群(西群・塚穴古墳群) 69 片ヶ谷古墳群 70 墓谷古墳群 71 唐井谷古墳群 72 尼ヶ谷古墳群 73 弁天山古墳群 74 弁天山C1号墳 75 弁天山B1号墳(弁天山古墳) 76 弁天山A1号墳(岡本山古墳) 77 岡本山A3号墳 78 岡本山古墳群 79 御坊山古墳 80 群家車塚古墳 81 前塚古墳 82 狐塚古墳 83 今城塚古墳 84 上野遺跡 85 芥川廃寺瓦窯跡 86 郡家本町遺跡 87 郡家川西遺跡 88 嶋上郡衙跡附寺跡・芥川廃寺跡 89 川西古墳群 90 郡家今城遺跡 91 津之江南遺跡 92 塚原古墳群 93 新池埴輪制作遺跡・国史今城塚古墳附新池窯跡 94 上土室遺跡 95 土室遺跡 96 關鷄山古墳 97 番山古墳 98 石塚古墳 99 土保山古墳 100 二子山古墳 101 石山古墳 102 太田茶臼山古墳 103 太田遺跡 104 太田廃寺跡 105 ツゲノ遺跡 106 水室塚古墳 107 水室遺跡 108 宮田遺跡 109 西国街道(山陽道) 110 鶴殿遺跡

本図は、大阪府地理情報提供システムの埋蔵文化財と2001年大阪府文化財分布図をもとに、「国土地理院制作の平成14年版1:25000地形図の「高槻」・「淀」を加筆して作成した。

図2 周辺の遺跡



ナイフ形石器終末期の横長ナイフや小形切出しナイフが出土している。縄文時代早期から前期には、淀川沿いの大塚遺跡や柱本遺跡から北白川下層式や東海系条痕文土器や有舌尖頭器が出土し、中期には、丘陵上の塚穴遺跡や天神山遺跡から船元式土器が出土している。後期中葉になると富田台地縁辺部や芥川扇状地に宮田遺跡や上田部遺跡などの遺跡が出現し、芥川遺跡からは、土壙墓や土器棺墓群が検出され、他地域との交流を背景とした加曾利 B I 式を含む多量の土器や石皿・磨石などが出土している。

後期から晩期になると定住化や周辺地域との交流もさらに進み、晩期の船橋式から長原式の段階には、各地で遺跡数が飛躍的に増加する。

**弥生時代** 檜尾川が形成した扇状地に立地する安満遺跡は、畿内でもいち早く稲作文化を受容した遺跡の一つで、二重の環濠によって囲まれた居住域、用水路と井堰を備えた水田域、方形周溝墓群を主体とする墓域など前期集落の姿が明らかにされている。遺跡からは、石材としての近江産高島石や青銅製品など他地域との活発な交流を背景とした多様な遺物が出土し、茨木市の東奈良遺跡とともに北摂地域における拠点的な集落として発展し、その範囲は東西 1.5 km、南北 0.6 km にまで拡大する。

前期末から中期には、各地で遺跡の規模や数が増大し、丘陵上に進出する遺跡も出現する。安満遺跡の周辺でも、北西の標高 30～50 m の丘陵上には天神山遺跡や慈願寺遺跡などが出現し、天神山遺跡からは住居跡や方形周溝墓のほか、突線紐Ⅱ式の銅鐸や銅剣形石剣などが出土している。

中期末から後期初頭には、安満遺跡や天神山遺跡などの中心的な集落が徐々に衰退に向かう中で、標高 60～100 m の急峻な丘陵上に、80 棟前後の竪穴建物からなる居住域を幅 2.5～6.0 m、深さ 2.5～4.0 m、総延長約 1.0 km の大規模な環濠で囲んだ古曾部・芝谷遺跡が出現し、周辺では狭隘な谷底平野を臨む丘陵上に竪穴建物を計画的に配置した成合遺跡、天神山丘陵や安満山南麓には、数棟の竪穴建物からなる紅茸山遺跡や萩之庄遺跡などの小規模な遺跡が出現する。これらの遺跡は、後期後半には姿を消す古曾部・芝谷遺跡の動向と連動するかのよう存続期間が短く、成合遺跡は中期末頃に、紅茸山遺跡や萩之庄遺跡は後期中頃には姿を消す。檜尾川流域遺跡群のこうした動向に対して、西部芥川流域では、大蔵司遺跡、芥川遺跡、郡家川西遺跡、津之江南遺跡など、遺跡の数や規模が増大し、弥生社会の中心が西に移動していたことがうかがえる。

**古墳時代** 三島古墳群の東半部を占める高槻市域の古墳は、芥川流域右岸～女瀬川流域の西部、芥川左岸～高槻丘陵の中部、檜尾川流域と安満山山系の東部の三つの地域的なまとまりとして展開する。集落遺跡は、女瀬川流域や芥川流域では、氷室遺跡、郡家川西遺跡、真上遺跡、津之江南遺跡、中部では服部宮之川原遺跡、東部では紅茸山南遺跡、安満北・同東遺跡、萩之庄南遺跡、井尻遺跡、上牧遺跡などが知られるが、各地とも遺跡群としての具体的な動向については不明な点がまだ多く残されている。

安満山南麓の標高 125 m の細い尾根上には、箱形木棺を埋葬施設とする 21 m×18 m の安満宮山古墳が位置する。平成 13 年の調査によって、青龍三年銘方格矩鏡や三角縁神獸鏡を含む青銅鏡 5 面が出土し、我国でも最古級の 3 世紀後半に築造された古墳であることが明らかになった。

富田台地に立地する弁天山古墳群では、A 1 号墳（岡本山古墳）→B 1 号墳→C 1 号墳（弁天山古墳）と続く三島平野の前期～中期初の首長墓の系列が明らかにされた。C 1 号墳からは、竪穴式石室にコウヤマキの割竹形木棺を納めた埋葬施設から、三角縁神獸鏡、碧玉製管玉や石釧、鎌・斧・鉋・鋸・刀などの鉄製工具や武具、銅鏃など、「三島の王」にふさわしい豊富な副葬品が出土した。芥川・女瀬川流域では、郡家車塚古墳・前塚古墳などの前方後円墳や、墓谷古墳（前方後方墳）、鬮鶏山古墳、仿製三角縁神獸鏡が出土した焼山古墳、石山古墳、竪穴式石室に割竹形木棺を納めた径 30 m の土保山古墳、

二子山古墳、番山古墳などが築造される。そうした中、これまでの三島地域の首長墓とは隔絶した規模の太田茶臼山古墳（全長 226 m）が築造され、隣接する土室の地に築かれた新池埴輪窯は、太田茶臼山古墳や周辺の古墳にも埴輪を供給している。

東部地域では、標高 100 m 前後の安満山南斜面の尾根上に萩之庄 1 号墳と 2 号墳の 2 基の前方後円墳が築造される。全長約 20 m の 1 号墳からは、竪穴式石室に割竹形木棺を納めた埋葬施設から碧玉製石釧や車輪石などが出土した。また、安満宮山古墳とは谷を隔てた東側の尾根上（萩之庄支群）から、粘土郭を内部施設とする 4 世紀後半の古墳（B 0 号墳）や、萩之庄古墳の西側の尾根から 5 世紀前半の木棺直葬の小方墳（C 1 号墳）が発見され、安満宮山古墳や萩之庄古墳群との関係が注目される。このほか、安満山北西の天神山丘陵上には、一辺約 20 m の紅茸山 C 2 号墳や径 18 m の紅茸山 C 3 号墳などの中期古墳が築造され、C 3 号墳からは、割竹形木棺を直葬した土壙墓 2 基が検出され、碧玉製品や滑石製小玉などが出土した。中部の高槻丘陵の南西には前方後円墳 1 基と円墳数基からなる慈願寺山古墳群が築造される。慈願寺山 1 号墳は木棺を埋葬施設とし、5 号墳の埋葬施設からは須恵器蓋環・蓋・有蓋高杯や鉄鏃・鉄斧が出土し、周辺からは内行花文鏡 1 面や神獸鏡 2 面が出土している。

6 世紀前半には、日本最大の家型埴輪を含む 200 点以上の形象埴輪を配置した埴輪祭祀場を有した全長 350 m の今城塚古墳が築造され、新池埴輪窯の生産もピークを向かえる。後期中頃になると在地の首長墓は小型化し、東部の天神山丘陵上には、狩猟埴輪群で知られる全長 60 m の屋神車塚古墳や中将塚古墳などの前方後円墳が築造され、一方で、横穴式石室を埋葬施設とする羅王山古墳、伊勢寺古墳、宿弥塚古墳、成合 1 号墳などの独立墳的な円墳が築造される。後期後半になると、西部地域では、110 基以上からなる塚原古墳群を最大規模として、50 基からなる塚脇古墳群、塚穴古墳群が、東部の安満山の南山麓には、40 数基からなる安満山古墳群、磐手杜古墳群、梶原古墳群、法照寺古墳群などの群集墳が形成される。安満山古墳群は、安満山山麓古墳群のなかでは最高所の標高 100 ～ 200 m に築造される。公園墓地造成の際には 5 基の発掘調査が行われ、須恵器のほか金環・銀環やガラス小玉などが出土し、6 世紀後半～末の横穴式石室を埋葬施設とすることが明らかにされた。

梶原古墳群は、名神高速道路拡幅工事に際して 18 基の発掘調査が行われた。そのうち、6 世紀中葉から 7 世紀前半の D 1 号墳からは、凝灰岩製家形石棺と須恵器・三累環式柄頭・双葉剣菱形杏葉など豊富な武具や馬具が出土した。調査範囲には、丸山古墳群と萩之庄瓦窯跡の遺跡が含まれていたが、調査の結果、遺跡の範囲が整理され梶原古墳群に含まれた。この他、7 世紀初頭～中頃の竪穴建物・掘立柱建物・柵列や古墳時代前期の土器棺、高槻市域では唯一となる 4 世紀末～5 世紀初頭頃の埴輪円筒棺が検出されている。磐手杜古墳群は現在 3 基の古墳が確認されている。うち 1 基は、昭和 36 年の名神高速道路建設に先立つ発掘調査によって、銀環 1 点のほか土師器片・須恵器片・埴輪片・鉄製品（鉄鏃？）などが出土し、6 世紀後半の横穴式石室を埋葬施設とする方墳であることが確認された。

近年、新名神高速道路関連の発掘調査では、生産基盤としては脆弱な成合谷の平野を見下ろす周辺の丘陵上から、成合 1 号墳、7 世紀前半～中頃の成合西王寺山古墳群（1～3 号墳）や、さらに奥まった丘陵南東斜面から 7 世紀前半～中頃の成合地獄谷古墳群（2 基の古墳と 1 基の竪穴式小石室）が発見された。成合西王寺山古墳群や成合地獄谷古墳 2 基も、成合 1 号墳と同様に横穴式石室を埋葬施設とし、南東の開析谷の方向に開口している。

そして終末期、阿武山古墳や塚原 N 2 号墳・N 5 号墳を最後に古墳の築造は終焉する。

古 代 高槻市域は古代には摂津国嶋上郡に属していた。郡域には島本町全域と枚方市の一部が含まれ、

東は山城国乙訓郡に接する。『続日本紀』和銅4（711）年12月の条に、「摂津国嶋上郡に大原駅を置く」と見られるのが嶋上郡の史料上の初見である。大化元（645）年の前後には三島評（コオリ）が置かれ、律令体制が完成したとされる大宝元（701）年の大宝令施行の頃には、嶋上郡と嶋下郡の2郡に分割される。

平野部には正方位の条里型地割の区画が連続して見られ、山陽道（西国街道）と推定されるルートは、安満山の山裾を通り、高槻丘陵の南側扇状地を抜けて富田台地を横断している。ルート上に位置する郡家川西遺跡からは、両側に側溝を備えた幅10～12mの道路遺構が検出されている。官道沿いには、大原駅（梶原南遺跡）や芥川駅（芥川遺跡）、嶋上郡衙（嶋上郡衙跡）などの公的な施設が置かれ、梶原寺（嶋上郡）、芥川廃寺（嶋上郡）、大田廃寺（嶋下郡）、穂積廃寺（嶋下郡）などの古代寺院跡が分布している。

梶原南遺跡からは、計画的に配置された大型の掘立柱建物群や井戸が検出され、梶原寺や梶原瓦窯跡との関連も指摘されている。三島地域最古の梶原寺（僧寺・尼寺）の推定地とされる畑山神社の周辺には「大門」・「末房」・「東西方院」などの字名が見られ、神社境内や周辺地域の調査では、奈良時代の大型掘立柱建物、2間×7間の回廊風掘立柱建物が検出され、神社境内には梶原寺の礎石と思われる石造物が1個残っている。「正倉院文書」には、天平勝宝9（757）年3月、造東大寺司が、摂津職を通じて梶原寺に対して東大寺の瓦を発注した記述が見られる。梶原瓦窯跡の調査では、7世紀後半から8世紀前半の間に操業された、半地下式登窯、地下式窯、ロストル式穴窯の瓦窯が発見され、平城宮系文様の単弁文軒丸瓦や複弁八葉蓮華文軒丸瓦、飛鳥時代百濟様式の素弁八葉蓮華文軒丸瓦などが生産され芥川廃寺へも供給されていたことが明らかにされている。また、表採された軒瓦の中には難波宮型式の瓦を祖型とするものが見られ、近接する萩之庄窯跡からは長岡京系の瓦や塼が表採されている。

嶋上郡衙跡からは、正殿、脇殿、回廊、正倉などの掘立柱建物群や石組井戸、芥川廃寺跡関連の遺構や「上郡」と墨書された土器などが検出され、昭和46年、嶋上郡衙附寺跡として国の史跡に指定された。

嶋上郡衙跡の西に隣接する郡家今城遺跡からは、奈良時代から平安時代の大型掘立柱建物群や銅製や石製の帯飾具・皇朝十二銭・硯、「玄蕃」と墨書された土師器坏、越州窯青磁碗・奈良三彩壺などの遺構・遺物が出土し、役人層など有力階層の人々に関連する遺跡と考えられる。このほかにも、一辺1m以上の掘方を有する掘立柱建物群が検出された津之江南遺跡、奈良時代の掘立柱建物群や火葬墓（1基）が検出された紅苜山遺跡、大型の掘立柱建物や石組井戸が検出され石製帯飾具（巡方）が出土した安満北遺跡などが存在する。しかし、これら古代律令期の遺跡は、嶋上郡衙などの動向と連動するかのようになり10世紀末には衰退し姿を消していく。

嶋上郡衙跡、郡家今城遺跡、郡家川西遺跡の北側丘陵上には、帯飾具や刀子、水瓶などを納めた木棺墓や蔵骨器が検出され、官人層の墓を含む岡本山古墓群（A・B地区）が造営され、高槻市真上の荒神山には、当地を本貫地とし正三位・御史大夫に任じられた石川年足の墓が築かれる。年足墓からは金銅製の墓誌が出土し、国宝に指定されている。

延暦3（784）年には平城京から長岡京へ、さらに延暦13（794）年には長岡京から平安京へ遷都される。長岡京遷都の際には三国川（現神崎川）が開削されて淀川と通じ、平安京遷都の際には大原の駅が廃止され、京都府山崎の地に津と駅が置かれ、淀川を介した水運が栄える。淀川沿いの高水敷には多くの牧が置かれ、周辺の荒地は宮内省直営の官田や天皇家私領である勅旨田など、国家主導型の大規模開発が進められる。その一つ安満勅旨田は、平安時代後期には藤原摂関家領安満庄となり、12世紀

後半には藤原家の氏神である大和春日大社に寄進される。高槻市成合には、安満庄の鎮守として栄えた春日大社が位置しているが、この神社の境内からは平安時代後期の軒丸瓦が採集されており、平安時代には官寺に列せられた悉檀寺にも推定されている。東檜尾川を挟んだ東の丘陵上に位置する成合遺跡からは、掘立柱建物・方形石組遺構・土壙墓など悉檀寺との関連で注目される遺構・遺物や8世紀後半～9世紀前半頃の須恵器窯（成合西王寺山窯跡）1基が検出され、近接する成合琴堂窯跡との関連が指摘されている。

平安時代には、山岳仏教が広がり高槻市北方山中には靈山寺、神峰山寺などの山岳寺院が建立されるが、成合東方の安満山山中にも、延暦9（790）年参議安部是雄によって邂逅山安満寺が建立される。康保元（964）年には、天台宗の僧千観によって金龍寺として再興され、「日想観」信仰の聖地として貴族層をはじめ多くの人々の信仰を集めて栄える。今は山中の石垣にその名残を留めるのみであるが、麓の金龍寺旧境内跡の調査では、貴族層との交流を背景とした須恵質の円面硯や白色の石製巡方や大型の土馬が出土している。

**中世** 中世には、西国街道沿いの桜井宿、芥川宿、大田宿や、淀川沿いの山崎・水無瀬・鶴殿・柱本・鳥飼などの川津が発達する。10世紀末頃には古代律令期の集落や官衙遺跡が衰退・消滅し、代わって11世紀から12世紀代になると、沖積地には井尻遺跡、上牧遺跡、安満遺跡、上田部遺跡、津之江南遺跡、宮田遺跡など新たな集落遺跡が出現する。このうち井尻遺跡、宮田遺跡、上田部遺跡からは、摂関家や宮家に代わる新たな開発主体者としての有力農民層の屋敷地や輸入陶磁器など豊富な遺物が検出されている。

また、上田部遺跡、津之江南遺跡、宮田遺跡などの集落を見下ろす富田台地背後の丘陵上には、一般農民の共同墓地や有力階層の家族墓からなる岡本山古墓群（C・D地区）や龍泉窯系青磁碗、鏡、古銭、硯などを副葬した有力農民層の墓を含む1000基以上からなる集団墓地（上土室遺跡）が造営される。

#### 【参考文献】

- 日本考古学協会 1966年 「日本考古学年報14（昭和36年度）」
- 高槻市教育委員会 1966年 「紅草山及岡本山東地区遺跡の調査」 高槻市文化財調査報告書第2冊
- 高槻市史編さん委員会 1973年 『高槻市史 第6巻 考古編』昭和52(1977)年 『高槻市史 第1巻 本編』
- 大阪文化財センター 1974年 島谷稔 「高槻上代寺院跡の研究（一）」『大阪文化誌 第1巻第1号』
- 高槻市教育委員会 1978年 「49. 梶原寺跡」『昭和51・52年度 高槻市文化財年報』
- 高槻市教育委員会 1981年 「76. 梶原寺跡 77. 梶原埴輪円筒棺 78. 梶原南遺跡」  
『昭和53・54・55年度 高槻市文化財年報』
- 高槻市教育委員会 1985年 「6. 岡本山古墓群」『昭和56・57・58年度 高槻市文化財年報』
- 株式会社平凡社 1986年 大阪府の地名1 日本歴史地名大系 第28巻
- 名神高速道路遺跡調査会 1987年 「梶原瓦窯跡」
- 名神高速道路遺跡調査会 1988年 「梶原古墳群」
- 高槻市教育委員会 1991年 遺跡ガイド6 塚原遺跡
- 高槻市教育委員会 1991年 遺跡ガイド7 群家今城遺跡
- 高槻市教育委員会 1991年 遺跡ガイド8 宮田遺跡
- 高槻市教育委員会 1993年 遺跡ガイド11 嶋上郡衙跡

高槻市教育委員会 1993年 遺跡ガイド12 上田部遺跡

文化財学論集刊行会 平成6年 高橋公一 「梶原寺の平城宮系軒瓦」 『文化財学論集』

高槻市教育委員会 2000年 「安満宮山古墳」

高槻市教育委員会 2001年 「安満山古墳群秋之庄支群の調査」 『高槻市文化財年報 平成11年度』

高槻市教育委員会 2002年 「安満山古墳群秋之庄支群C1号墳の調査」 『高槻市文化財年報 平成12年度』

高槻市教育委員会 2003年 「安満山古墳群の調査(3)」 『高槻市文化財年報 平成13年度』

## 第2節 調査の方法

### 1. 現地調査

調査は、当センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル 2010」に則って実施した。調査地は、平成25年度に高槻市安満御所の町・下地内で実施した「磐手杜古墳群他13-1」（以下、「13-1調査」とする）の調査の結果、遺跡の範囲が広がった磐手杜古墳群の東端、標高45～50mの地点に位置する。調査面積は245㎡である。古墳時代の須恵器や平安時代の灰釉陶器長頸壺・石組が出土し、古墳や古代の遺構が埋没していると予測された。調査名と調査区を合わせた表記は、「磐手杜古墳群13-2-1」（以下、「13-2調査」とする）である。

調査地とその周辺の樹木や下草を伐採した後、テープと白線で調査範囲を明示し、事業者を含む関係者立会いの下で現地確認を行った。また、調査地の南側直下には、名神高速道路に沿って側道が通っているため、土砂落石防止用柵を設置するなどの安全対策の措置を施した後、調査に着手した。

腐葉土を含む表土層は、層の変化に注意しながら細かく掘削深度を指示し、バケットの爪先に鉄板を装着したバックホウを用いて慎重に掘削した。表土層掘削後は、下層の堆積状況や遺構面の有無を確認

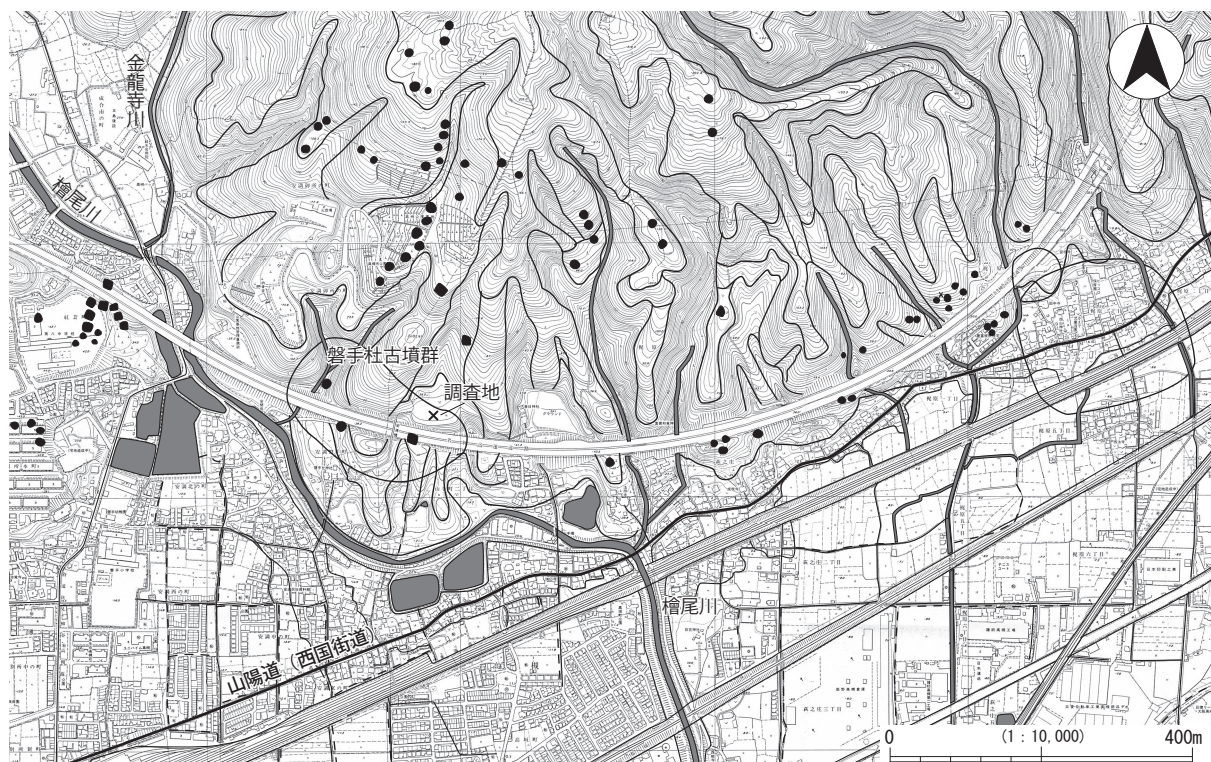


図3 磐手杜古墳群とその周辺

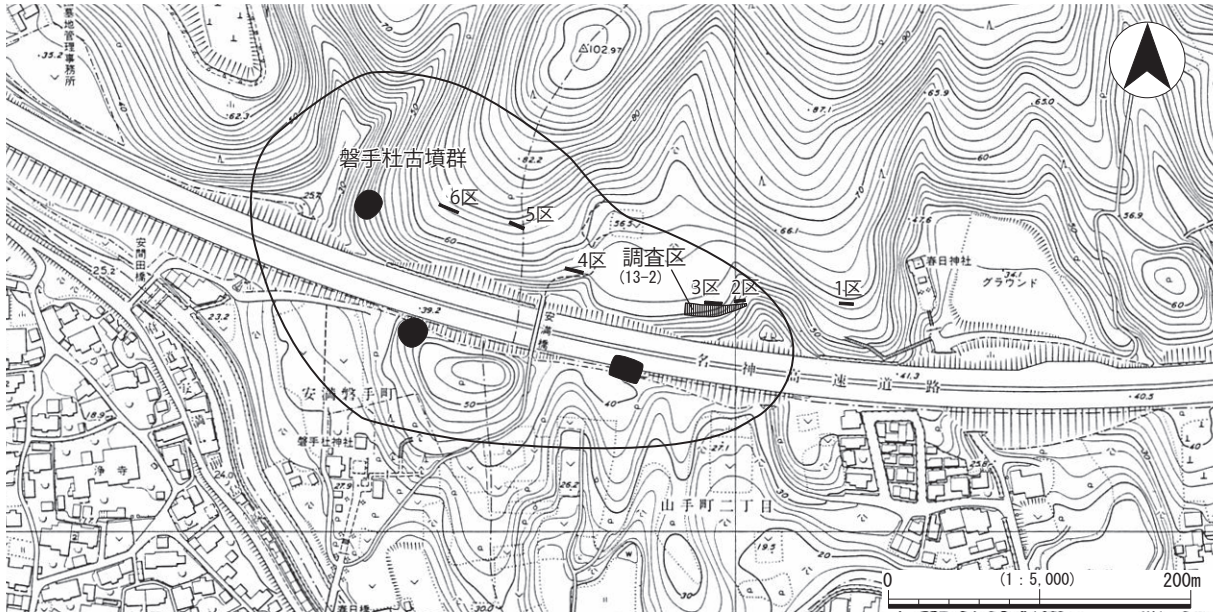


図4 調査区位置図

するため、幅 0.3 m のトレンチを掘削した。トレンチは、斜面に対して直交する調査区の西壁際と中央谷部に 2 ヶ所、調査区の南壁際に 1 ヶ所計 3 ヶ所設定した。

包含層の掘削は、層毎にスコップや大バチ等を用いて人力で掘削し、排土はベルトコンベアで調査区外に排出した。樹木の根は、大きなものは除根すると遺構面や層を損傷する恐れがあるためそのまま残置した。検出した遺構には、「1 土坑」のように、算用数字と遺構種別を組合せた名称・番号を与えた。

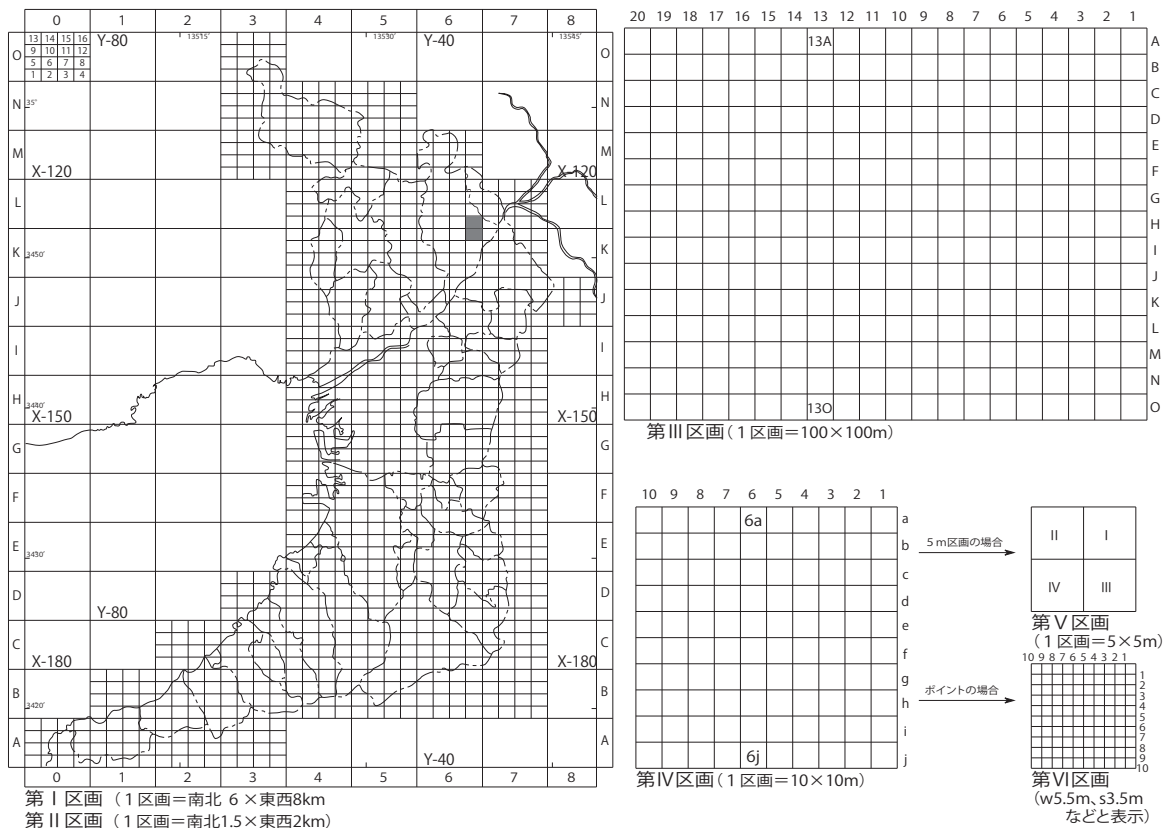


図5 地区割の基準

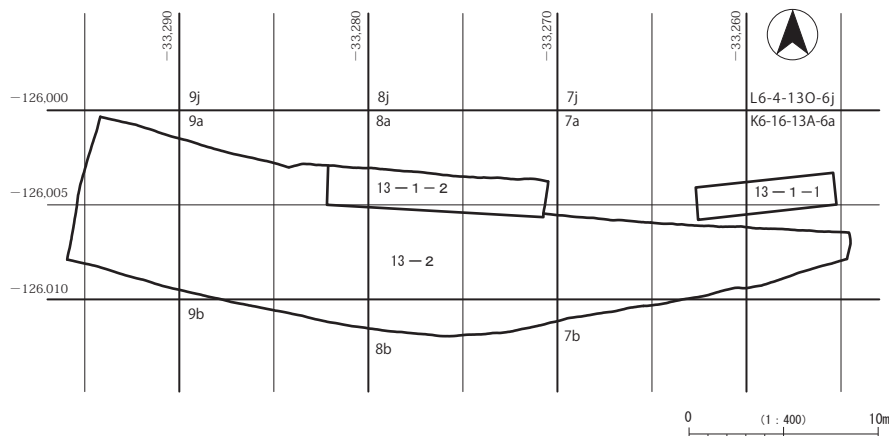


図6 地区割図

出土遺物は、マイラー用紙の遺物ラベルに、調査名（＝調査区名）－出土地点（地区割一層／遺構面－遺構名）－出土年月日を黒マジックで記入し、アミ袋に入れて日々回収した。

回収した遺物は、遺物登録番号を与え、洗浄・注記・台帳登録の基礎整理作業を行った。注記は、「調査名（遺跡名は一部省略）－登録番号」と墨書した。今回の場合は、「イワテモリ 13－2－登録番号」である。遺物登録台帳は、FileMaker 社製カード型データベースソフトの FileMaker Pro8 で作成したもので、遺物ラベル記載の項目毎にデータを入力した。また、後々の遺物抽出作業の際に容易に対象遺物が取り出せるように検索用フィールドを設け、登録番号ごとに、個々の遺物が判別できるサイズで、遺物ラベルと一緒に撮影したデジタルカメラの画像を貼付した。

**地区割** 世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系を基にした地区割を設定する。この地区割は、大阪府全域をカバーする。大阪府の南西隅、 $X = -192,000 \text{ m}$   $Y = -88,000 \text{ m}$  を起点として、南北 90 km 東西 72 km の範囲に、第 I 区画（1 区画南北 6 km × 東西 8 km）から、第 II 区画（1 区画南北 1.5 km × 東西 2.0 km）、第 III 区画（1 区画 100 m × 100 m）、第 IV 区画（1 区画 10 m × 10 m）、第 V 区画（1 区画 5 m × 5 m）までの 5 段階の区画を設定したものである（図 5）。今回の調査地は、第 I 区画 - 第 II 区画 - 第 III 区画 - 第 IV 区画が、K 6－16－13 A－6 a～10 a、K 6－16－13 A－7 b～9 b となる（図 5・6）。

**写真撮影** 中判 6 cm × 7 cm カメラによる撮影を基本とし、小判 35 mm カメラを補完用として併用した。

使用したフィルムは、中判・小判ともに、モノクロ（ISO 感度 400）とカラーリバーサル（ISO 感度 100）の 2 種類で、レンズは、67 カメラで 55 mm・90 mm・105 mm、35 mm カメラで 28 mm・35 mm・50 mm を準備した。他に調査記録とは別に、調査途中のメモ写真および台帳作成用としてデジタルカメラを使用した。また、航空測量の際には上空からの斜め写真を撮影した。写真は、FileMaker 社製のカード型データベースソフトの FileMaker Pro8 で作成した台帳に登録した。台帳には、調査名、撮影日時、撮影対象、撮影方向、撮影者、フィルム種類と番号、保管場所（場所・シート）などのフィールドを設定し、検索用フィールドには、67 カメラとほぼ同じ方向・画角で撮影したデジタルカメラの画像を貼り付けた。

**測量** 図面の縮尺は 1 / 20 を基本とし、状況に応じて平板を用いた 1 / 100 の全体図や 1 / 10 の出土状況図を作成した。また、遺物出土状況図などを作成する際に、周辺に座標杭が無く、任意に設定した測量原点には対空標識を置き、航空測量の際に取り込み作成した図面にプロットした。測量は全て

平面直角座標第Ⅵ系を基準とし、方位は座標北、水準は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。また、全体図の作成には、ヘリコプターをカメラステーションとする航空測量を業務委託し、1 / 400 撮影による1 / 50 と1 / 100 の遺構図と平面図を作成した。航空測量は、平成18年度に大阪府茨木土木事務所が設置した3級基準点を既知点として、新たに4級基準点1点を設置し、原則5mごとの第Ⅳ区画の地区割にそった杭に標定点を設けた。

その他 調査終了後は、現地にて大阪府教育委員会の確認を受けた後に事業者が現地を引き渡した。この現地立会は、調査途中であっても、状況に応じて機会を設け、随時指示・指導を受けた。

## 2. 整理作業

整理作業についても当センターの調査マニュアルに則って実施した。調査（13-1・13-2調査）では、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器など、55 × 35 × 15 cmサイズのコンテナ2箱分の遺物が出土した。

遺物の洗浄・注記・登録などの基礎整理作業は、現地発掘調査中に終了させ、接合・復原・実測等の作業は中部調査事務所で実施した。出土遺物は、出土地点（層・遺構・地区）ごとに1点ずつチェックしながら、層や遺構の時期と性格を検討するうえで有効な遺物を抽出し、出来る限り実測図を作成した。

実測図は原寸で作成し、図面には法量・器形や調整の特徴、色調などの観察所見を書き添えた。実測図を作成した遺物は、報告書写真図版のレイアウトに従って写真撮影を行った。

作成した図面は図面台帳に登録し、個々の図面について矛盾や誤記がないか、関連遺物・写真・空測



写真1 調査前現況（北東から）



写真2 表土層掘削状況



写真3 包含層掘削状況



写真4 大阪府教育委員会 現地立会



図の成果を用いて相互にクロスチェックを行った。その後、報告書に必要な掲載図面の版下を作成した。また、出土遺物実測図も同様に版下を作成・トレースし、入稿原稿を作成した。

現場で撮影した写真は、報告書に掲載するものを選定し、遺物と同様に写真図版レイアウトに従って紙焼し、原稿を作成した。以上の作業と並行して本文の執筆・編集し原稿を整えた後、平成27年11月に入稿した。

整理作業を終えた遺物は、報告書掲載遺物と未掲載遺物に分けて収納した。現地で作成した図面と写真は一括して中部調査事務所に収納し、全ての整理作業を完了した。

## 第3節 遺構と遺物

### 1. 基本層序

高槻市東部は、地質学的には古・中生層で構成される丹波帯（丹波層群 - 丹波山地）と礫・砂・粘土で構成された大阪層群（高槻丘陵）と砂・礫を主体とする沖積層（沖積平野）に区分され、古墳時代後期古墳群が立地する安満山は東西方向に発達した輝緑凝灰岩と珪岩を主体とし、南先端部には石灰岩や大阪層群が点在する。

安満山南麓の急斜面は萩之庄川をはじめとする中小河川が開析谷を刻んで平野部に流れ、裾部には狭い扇状地が形成されている。磐手杜古墳群が立地する山麓先端部の尾根の西側と東側には深い谷が刻まれた急な崖面となり、磐手杜神社の裏手、標高30m付近の等高線を境として尾根の南東側には、浅い谷が入り込み、その一部は調査区に達している（図3・4）。調査地はこの尾根の北東部分で、標高45～50mの地点に位置する。調査地の北側は、人工改変地と思われる緩い傾斜面をなし、北東側には低い墳丘状の高まりが見られる。調査地周辺は、中・低木の樹木を若干含む荒地で笹などの下草がしげっていた。

東半は、表土層直下に部分的に明黄褐色砂質土の薄層が堆積する他は大阪層群の砂質・礫からなる地山面となるが、西半には浅い谷が入り込み、黄橙色や明黄褐色の中礫を含むシルト質砂層や砂質シルト層が堆積していた。調査区の西壁と北壁の断面を検討し、基本的な層位を設定した。谷頭とその周辺斜面地では層の連続性に乏しく、層境が不明瞭なところもあったが、概ね4層に大別できた。

**第1層** 層厚10～20cmの表土層とその直下に堆積する層厚20～40cmの、細砂から中砂を主体とするシルト質砂層などが堆積しており、これらを第1層として一括する。現地表面の標高は、調査区北西端が50mと一番高く、北東端で48.7m、南西端で46.7m前後である。調査区の南西側には、1m前後の段差を有して、人工改変地形と思われる緩やかな傾斜地が見られる。畠などの開墾によって本来あった堆積層がかなり削られていると思われる。また、調査区の北壁では、浅い谷状もしくは窪地状に掘削することによって、下の第2層が失われている箇所が見られた。樹木の根の影響が著しい。

全体にしまりがなく、地点によっては0.5～1.0cm大の中礫を含む。3層に大別が可能であり、各層とも、第1層帰属と思われる近世陶磁器の破片が数点出土した。

1-1層 黒色の表土層。

1-2層 2.5Y7/4 浅黄色や10YR6/4 にぶい黄橙色。細砂や粗砂を主体とするシルト質砂層。0.5



～1 cm大の中礫を少量含む。

1－3層 7.5Y6/4 にぶい黄色や 10YR7/6 明黄褐色。細砂および中砂を主体とする砂層。0.5～1 cm大の中礫を比較的多く含む。調査区中央部北端に分布し、第2－1層土壌化層を覆う。

**第2層** 東半は、第1－1層を除去した段階で既に南西と南方向に傾斜する地山地形が現れる。西半に堆積する浅黄色やにぶい黄橙色の細砂や中砂を主体とする砂質シルト層を第2層として一括した。調査区の北壁際の幅1 mの地山面では、西と東が高く中央部に向かって傾斜する幅50～70 cmの狭い平坦部となっており、ここには第3層が堆積する。

第2層の層厚は30～70 cmで3層に大別した。北端の壁際では60～70 cm、斜面部ではそれぞれ30 cm前後の層厚である。全体に細砂や中砂を含む均質な層であるが、層界は不明瞭である。調査区北端の平坦部とその周辺には、第1層の直下に層厚10～15 cmの土壌化層が堆積する。面として検出することは出来なかったが、断面の検討などから土壌化はそれほど進んでいない。母材となるのは層厚15～30 cmの砂質シルト層だが、北西部では下層との層界が不明瞭である。

2－1層 10YR5/6 灰黄褐色。細砂・中砂を主体とする砂質シルト層。均質な土壌化層。

2－1層 2.5Y6/4 にぶい黄色や 10YR7/3 にぶい黄橙色。粗砂を含み細砂を主体とする砂質シルト層。土壌化層の母材となる層。

2－2層 10YR6/6 明黄褐色。細砂・中砂を主体とするシルト質砂層。0.5～1 cm大の中礫を少量含む、しまりは弱い。

2－3層 10YR6/4 にぶい黄橙色や 10YR7/6 明黄褐色。細砂・中砂を主体とするシルト質砂。わずかに粘性があり、しまりは弱い。

**第3層** にぶい黄褐色や明褐色の砂質シルト層を主体とし、層相によって3層に大別される。各層厚は30～60 cmで、南側斜面の段の直下にはやや厚く堆積し、若干粘性がある。また、層中に中礫や6 cm前後の中礫を含む箇所も見られた。第2層同様、ほとんど遺物は出土しなかった。ただ側溝掘削時、古墳時代後期の須恵器片が出土しており、第3層に帰属する可能性がある。

3－1層 10YR6/4 にぶい黄橙色や 7.5YR6/4 橙色。細砂を主体とするシルト質砂層。中砂、0.5～5 cm大の中礫、風化礫を含み、ややしまりがある。調査区南端に堆積しさらに複数に細分できる。

3－2層 7.5YR5/6 明褐色や 7.5Y6/8 橙色。細砂を主体とするシルト質砂層。ややしまりがある。

3－3層 2.5Y7/4 浅黄色や 10YR5/4 にぶい黄褐色。細砂・中砂を主体とするシルト砂、シルト質砂層。明黄褐色。細・中砂を主体とする箇所も見られる。しまっている。

**第4層** 調査区西半谷地形の谷頭付近、東西両方向から地山が下がり、一番低くなった小テラス部分に堆積する層を一括する。0.5～1 cm大の中礫を多く含む、よくしまっており、礫間には、10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質砂などが狭在する。層相と堆積範囲が石組遺構周辺に限られていることから、火葬墓に関わる人為的に形成された層と考えられる。

## 2. 遺構と遺物

今回の調査地は、東西に深いV字谷が刻まれた尾根の中央部で、人工改変地形と思われる1 m前後の段差と狭い平坦地を含む比較的緩傾斜面の東端部に位置する。尾根の南端部を東西に名神高速道路が通り、尾根東側の先端には小規模な谷が入り込んでおり、そのうち一つは調査区に達している（図3・4）。

調査の結果、東半部は東側の谷に続く傾斜地形が、西半部からは小規模な谷地形と、北端の谷頭付近から石組遺構が検出された。調査区全体で検出できたのは地山面のみであるが、北壁の断面からは、⑪層 7.5YR8/4 浅黄橙色細砂を埋土とし⑩層 10YR7/4 にぶい黄橙色砂で覆われた幅 0.4 ~ 1 m、深さ 20 cmの落ち、②層 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質砂を埋土とする幅 0.6 m、深さ 30 cmの溝状の落ち、③層 2.5Y6/8 にぶい黄色シルト質砂層を埋土とする径 20 ~ 60 cm、深さ 30 cmのピットなどが認められ、第3 - 3層上面などの他にも複数の遺構面が存在すると思われるが、谷地形の中で層の連続性が悪く、さらにそれぞれの層相が酷似し、遺構面を判別する際鍵層となる堆積層が存在しないことから、面として検出することはできなかった。

層中からは、点数は少ないながら器壁の磨滅がほとんど見られない残りの良い弥生土器や須恵器数点が出土した。

### 火葬墓（図8～10 図版2・3）

13 - 1 調査区からは、ほぼ完形の灰釉陶器長頸壺1点と壺から南へ約0.7 m離れた地点から石組遺構が検出され、13 - 2 調査区で検出された石組は、13 - 1 調査区から西へ約0.7 mと近接した地点の同じ平坦面に構築されていたことから、一連の石組と考えられた。灰釉陶器長頸壺の中には炭化物と火葬骨が納められていたことから、石組を伴う、長頸壺を蔵骨器とする火葬墓の可能性が高いと判断した。

谷頭付近にあたる調査区北端には、壁際から0.6 ~ 2 mの幅の狭いテラス状の平坦部が見られ、46.8 m前後の等高線を境として南側は急な斜面地形を成している。テラス部分の地山面は、西端が一番高く48.3 mで、東に向かって下降し、中央部が46.8 mで一番低く、東に向かって再び高くなり東半部では47.8 m前後となる。火葬墓は、テラスが一番低くなった中央部で検出された。

火葬墓は、北壁および南北アゼの土層断面を中心に検討した結果、谷の東斜面側から、0.5 ~ 1.0 cm大の中礫を主体とする礫層（北壁⑥層）や3 cm大の中礫を含むシルト質砂層（北壁⑤層）を盛って構築されていた。また、東側地山面の傾斜がやや急なことから、盛土される前に斜面形成などの人の手が加えられた可能性が考えられる。蔵骨器が帰属する層準は、北壁⑤層と⑫層、中央南北アゼ③層で、この部分も火葬墓の盛土となる。北壁の⑤層と⑫層は、西側に向かって層相が変化し、墓の盛土部分と谷内堆積土との層界が不明瞭となり、調査時点では、同一層として誤認していた可能性が高い。盛土は、砂質シルトを主体とする上部層と礫を多く含む砂を主体とする下部の2層に大別される。下部層は、0.2 ~ 0.4 cmの層厚で、0.3 ~ 1 cm大の中礫を多く含む比較的よくしまっている。上部層は、下部層に比べて比較的均質なシルト質砂層で、層厚10 ~ 20 cmの明黄褐色土層と層厚10 cm前後でやや土壌化した灰黄褐色砂質シルト層に分層できる。盛土残存高は、南側テラス面からは約0.7 m、東側地山面からは約0.2 mを測る。

石組は、蔵骨器よりは約0.8 m低いテラス面の南北0.7 ~ 0.8 m、東西3.0 mの範囲に残存しており、中央南北アゼ⑪層の3 ~ 5 cm大の中礫を多く含む細砂を主体とする砂層をベースとして構築されている。⑪層はテラスを確保するために造成された層と考えられる。石組の東端はテラス面と丘陵斜面との境が

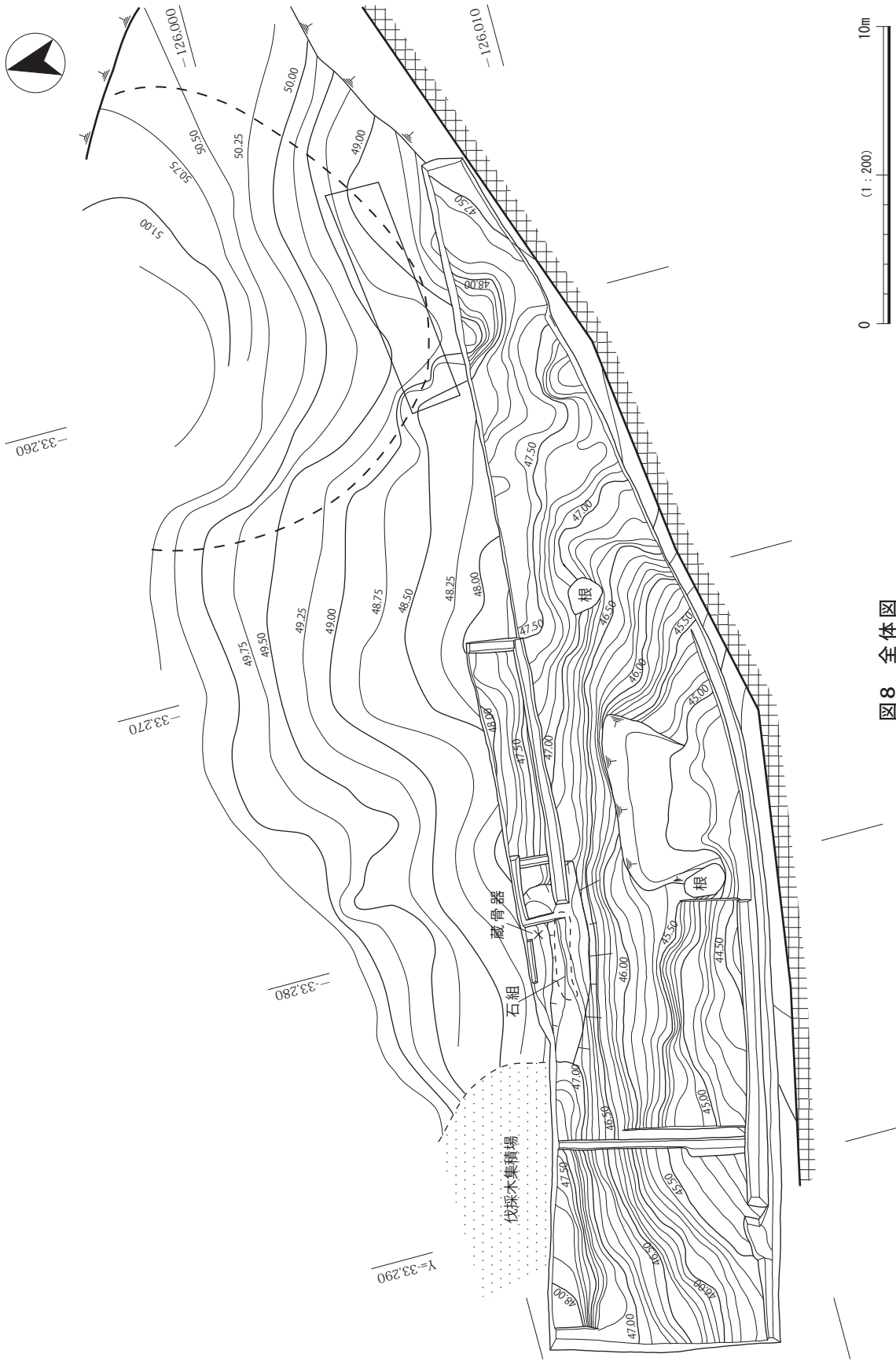


図8 全体図

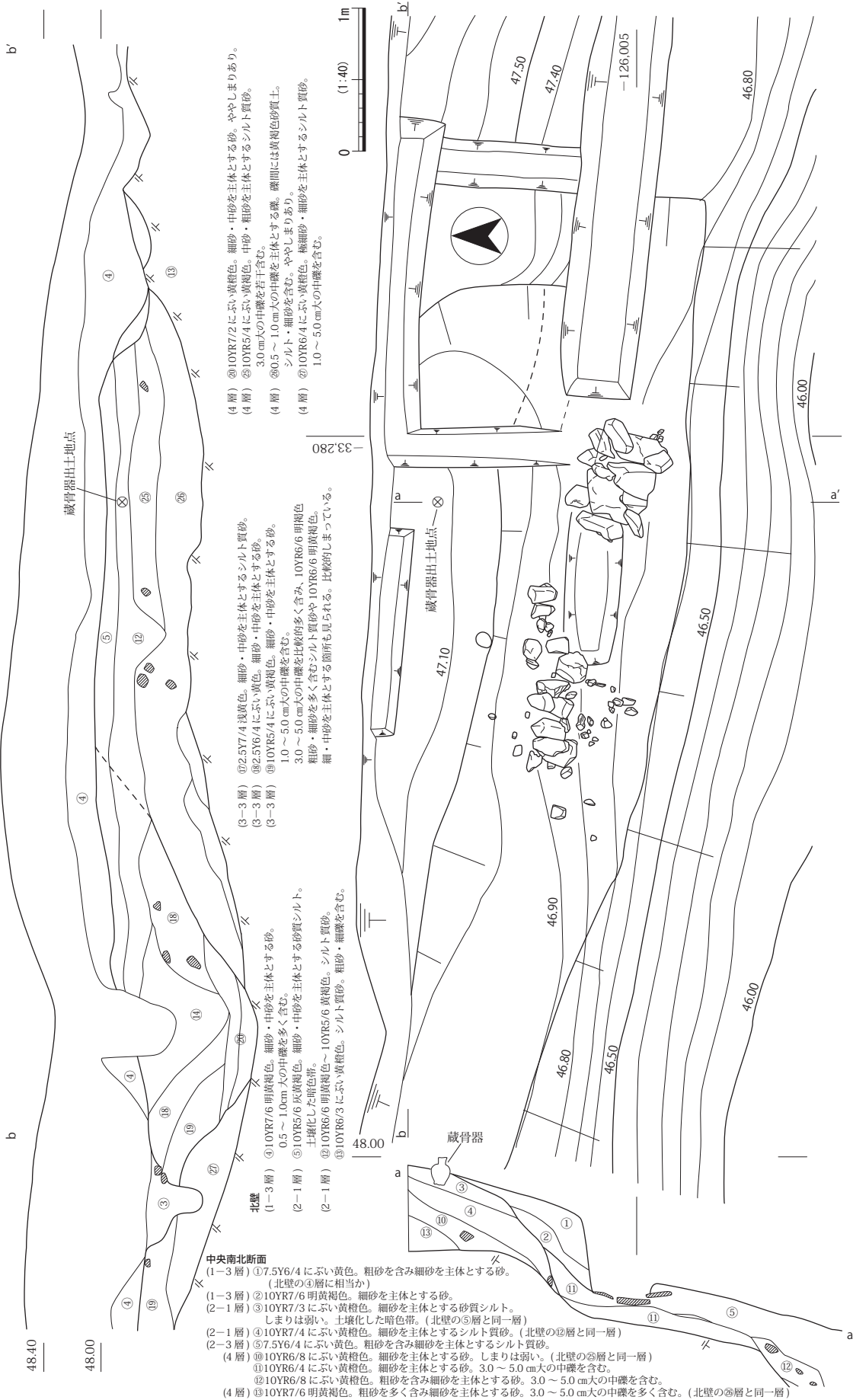


図9 石組検出状況

不明瞭となり、南側は急な斜面地形に続く。使用されていた石材には、20 × 30 cm前後の板材や径 15 cm大の円礫、こぶし大の中礫などが見られたが、材の選択や配置に規則性などは窺えなかった。石組が検出されたのは、南側部分のみであった。周辺の地形などから、南側斜面の崩壊防止と正面観を意識した配置であったと推定される。

蔵骨器は、検出時点で既に蓋を含めて頸部上半から口縁部を欠損していた。埋納土壌の掘り方については、今回の調査でも平面・断面ともに検出できなかった。土器の周辺には均質なシルト質砂層（北壁⑤層、中央アゼ③層）が堆積するが、周辺には人為的なブロック土の混入、炭や灰層、玉砂利や灰白色の細砂～極細砂の薄層の広がりなどは認められなかった。蔵骨器は、土壌に納められることなく、正位に据え置かれたまま、土を被せて埋納されたと思われる。

人骨については、大阪市立大学大学院医学研究科安部みき子助教授のご厚意により鑑定していただき、①性別までは判定できないが、骨の厚みなどから成人の骨である、②少なくとも頭蓋骨、肋骨、大腿骨、脛骨などの部位が確認でき、火葬後に大きい部位を中心に選んで砕いた後に収骨された、③同じ部位でも、白色化し細かいヒビがはいったもの（高温）や黒く炭化したもの（低温）などの焼けムラがあるなどのご教示を頂いた。

この他、東側平坦部から、幅 60 cm、深さ 40 cm、断面 U 字形の南北方向の溝が検出され、火葬墓東端を画する溝の可能性が考えられる。

火葬墓として検出されたのは、南端のごく一部で全容は不明である。蔵骨器を中心として東側の溝までは 2.1 m、盛土前の斜面上端までは 1.5 m、南側石組端までは 1.5 ～ 1.7 m、西側盛土裾部までは 2.5 mを測る。火葬墓は、谷を望む谷頭東斜面に盛土して築かれた、一辺 1.5 ～ 2.5 m、高さ 0.2 ～ 0.7 mの規模で、外表施設として、斜面地側の南裾部に石組を設けた構造である。

1 は、蔵骨器に転用された灰釉陶器長頸壺である。頸部上半から口縁部を欠損している。欠損部分はかなり磨滅が進んでおり、意図的に打ち欠かれた痕跡は確認できなかった。残存高 19.8 cm、体部最大径 12.4 cm、体部高 13.4 cm、高台部径 6.9 cmを測る。ややなで肩の体部に高さ 0.65 cmの高台を貼り付ける。高台内面は内傾し端部は丸く収める。外面には濃緑色の自然釉がかかる。内外面 2.5Y7/1 灰白色、7.5Y5/2 灰オリーブ色、断面 2.5Y7/2 灰黄色を呈し、石英・長石・黒色鉱物粒を若干含むが胎土は緻密で、焼成は良い。外面体部下半と底部は回転ヘラケズリでその他外面には回転ナデ調整を施す。8 世紀後半～9 世紀前半の所産である。

#### その他の出土遺物（図 10・図版 4）

上述の灰釉陶器長頸壺の他、ほとんど磨滅していない須恵器片が出土している。2 は、13 - 2 調査の第 1 層から出土した須恵器坏身である。口径 10.7 cm、残存高 4.2 cmである。口縁部はやや内湾気味に立ち上り端部は薄くやや外反する。内・外面とも N6/1 灰色で、胎土は緻密で焼成は良い。底部外面には手持ちヘラケズリが施される。TK47 型式もしくは MT15 型式に属し、6 世紀前半の所産である。

3 は、13 - 1 調査の 2 区の西側側溝の第 2 層から出土した須恵器坏身である。口径 14.1 cm、残存高 3.3 cmである。口縁部はやや内傾し、口縁端部は丸く収める。器壁は厚ぼったい。内外面とも 2.5Y7/1・5Y7/1 灰白色で、胎土中には 2 mm以下の微小な石英・長石を含み、焼成は良い。TK10 型式で 6 世紀中頃の所産である。50 mから上、特に、51 mの等高線が円形を描くことから、径 12 m前後の円墳が存在する可能性があると思われる。

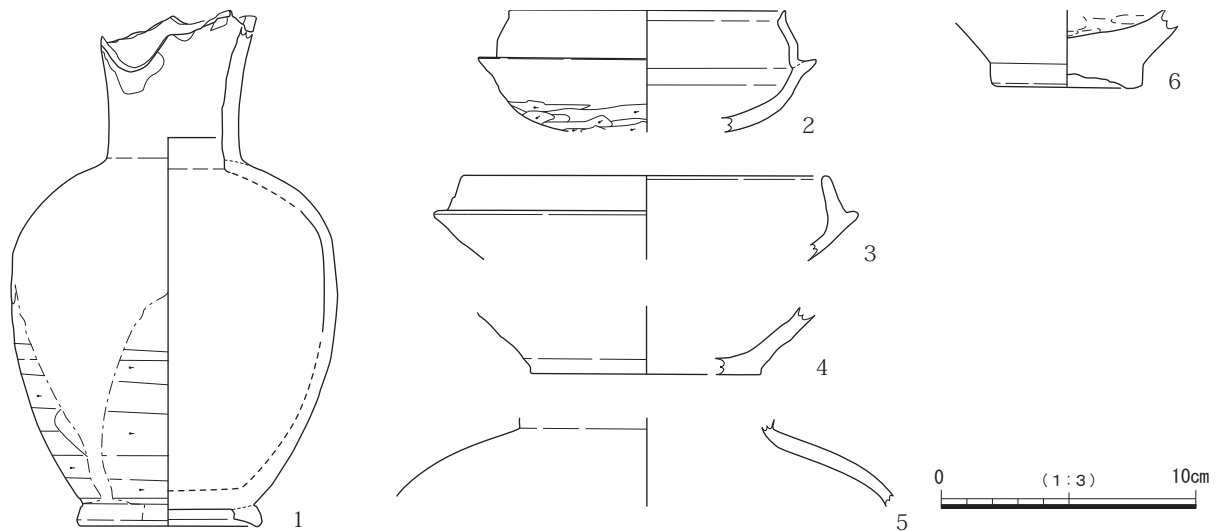


図10 出土遺物実測図

4・5は西半部第1層から出土した。4は、須恵器壺底部である。残存高 2.6 cm、底部径 8.8 cmを測る。壁厚 0.3～0.8 cmと薄く、内外面 5Y6/1 灰色を呈し、胎土は緻密で焼成も良い。内外面に丁寧な回転ナデ調整を施し、底部外面には静止糸きりの後丁寧なナデ調整を施す。10世紀初頭の所産か。5は、須恵器短頸壺の体部片と思われる。頸部径 9.9 cmを測る。器壁は 0.3 cm前後と薄く均質で、外面 2.5Y5/1 黄灰色、内面 2.5Y7/2 灰黄色を呈し、胎土は精良で焼成は良い。4と胎土・焼成が似ている。6は、西側側溝の第2・3層掘削中に出土した弥生時代後期壺の底部片である。底径 5.3 cm、残存高 3.2 cmである。内面は 10YR5/1 褐灰色を呈し、指頭圧痕を残す。外面は 10YR7/4 にぶい黄橙色を呈し、タテ方向のヘラナデ調整を施す。雲母、長石、石英粒をやや多く含む。胎土はやや粗いがさほど磨滅が見られない。安満山斜面の標高 100 m地点に弥生時代後期の竪穴建物 2～3 棟からなる萩之庄遺跡が立地しているが、周辺の尾根上にも同様の遺跡が存在していた可能性がある。



## 第3章 まとめ

調査の結果、外表施設として石組を伴う平安時代前期の火葬墓1基を検出した。また、調査区内に古墳は存在しないことが確認されたが、今回の調査でも6世紀初頭から中葉の残りのよい須恵器坏身が1点出土し、尚、周辺には古墳が存在している可能性が高いことを示唆している。この他、出土遺物の中には蔵骨器と思われる丁寧な造りの須恵器短頸壺片や弥生土器壺の底部が含まれていた。

### 1. 火葬墓

火葬墓は、上辺2.5m前後、下辺6.0m前後、高さ70cmの方形と推定され、その内の南半部が検出された。灰釉陶器長頸壺の蔵骨器は、やや南東側に寄っている。テラス面は、北の山側から墓前へ続く道を兼ねており、石組は火葬墓の正面に当る南側にのみ施されていた。

高槻市西部の嶋上郡衙跡や芥川廃寺、奈良三彩や多くの墨書土器が出土する郡家今城遺跡が集中する地域の北方丘陵上に立地するツゲノ遺跡や岡本山古墓群からは、奈良時代の蔵骨器や石組を伴う火葬墓が比較的多数検出されている。これらからは、帯金具などが出土する場合があり、嶋上郡の郡司などに任命された三島氏族に関連する墓の可能性が指摘されている。中でも岡本山C地区からは南向きの斜面を幅25m、奥行7mにわたってテラス状に造成した墓地が検出されており、下層の土坑墓の中には白磁四耳壺、灰釉四耳壺、灰釉水瓶などを蔵骨器とするものがみられた。C地区の墓は、きわめて限定された範囲に造られているところから、血縁関係が強い人々の類世墓としての性格が考えられている。C地区の火葬墓は13世紀代とされ、時代が異なるが、テラス状に造成しているなど共通している点がうかがえる。

また、高槻市中部の真上の荒神山からは、当地を本貫地とする正三位・御史大夫に任じられた石川年足の火葬墓が検出されている。

安満山丘陵とその周辺の東部地域には、古代律令寺院の一つで高槻市域でも最古の梶原寺跡や奈良時代の大型掘立柱建物や石製帯金具（巡方）が出土した安満北遺跡などが位置している。そうした中で、梶原古墳群D地区からは須恵器双耳壺を蔵骨器とする火葬墓が1基検出されている。蔵骨器は直径90cmの円形の土坑に正位にすえられていた。磐手杜古墳群の西方約300mの地点に位置する紅茸山古墳群中からも蔵骨器を伴う火葬墓1基が検出されている。

今回検出された火葬墓が岡本山古墳群のように集団的な群構成をとるものではない事は明らかであり、また、古代寺院の僧侶にかかわる火葬墓の可能性は低いと思われる。

これらの点については周辺地域における調査例の増加を待って検討したい。

### 2. 古墳

今回調査地点の緩傾斜面には、径10～15mの円墳状の高まりがみられた（図8）。3基の磐手杜古墳群の内、1基は横穴式石室を埋葬主体とする6世紀後半の方墳であることが発掘調査によって明らかにされている。今回検出した須恵器坏身はこれまでの当該時期の中では比較的古く、磐手杜古墳群の造墓開始時期を示す可能性が高い。磐手杜古墳群は梶原古墳群1期とほぼ同時期に築造されはじめた可能性が高い。

### 3. その他

1点ではあるが弥生時代後期の壺の底部片が出土した。器壁や割口の状態からあまりローリングを受けていない点や、幾筋もの谷が刻まれた丘陵地形という環境のなかで、遠距離から客土とともに運ばれてきた可能性は低い。弥生時代後期の周辺丘陵上には、萩之庄遺跡や紅茸山遺跡が営まれている。いずれも存続期間は短く、小規模な遺跡で、萩之庄遺跡は監視所的な機能を有した性格の遺跡との指摘もある。今回調査地とは約50m前後の高低差と距離を保っており、安満遺跡、安満北遺跡、紅茸山遺跡などとともにネットワークを構成する小規模な遺跡が点在しているものと考えられる。

#### 【参考文献】

- 日本考古学協会 昭和41年 「日本考古学年報14（昭和36年度）」
- 高槻市教育委員会 1966年 「紅茸山及岡本山東地区遺跡の調査」 高槻市文化財調査報告書第2冊
- 高槻市史編さん委員会 昭和48年 『高槻市史』第6巻考古編
- 大阪文化財センター 昭和49年 島谷稔 「高槻上代寺院跡の研究（一）」『大阪文化誌 第1巻第1号』
- 高槻市史編さん委員会 昭和52年 『高槻市史』第1巻 本編I
- 高槻市教育委員会 1978年 「49. 梶原寺跡」『昭和51・52年度 高槻市文化財年報』
- 高槻市教育委員会 1981年 「76. 梶原寺跡 77. 梶原埴輪円筒棺 78. 梶原南遺跡」  
『昭和53・54・55年度 高槻市文化財年報』
- 高槻市教育委員会 1985年 「6. 岡本山古墓群」『昭和56・57・58年度 高槻市文化財年報』
- 文化財学論集刊行会 平成6年 高橋公一 「梶原寺の平城宮系軒瓦」『文化財学論集』
- 名神高速道路遺跡調査会 1997年 「梶原瓦窯跡」
- 名神高速道路遺跡調査会 1998年 「梶原古墳群」
- 高槻市教育委員会 2001年 「安満山古墳群萩之庄支群の調査」『高槻市文化財年報 平成11年度』
- 高槻市教育委員会 2002年 「安満山古墳群萩之庄支群C1号墳の調査」『高槻市文化財年報 平成12年度』
- 高槻市教育委員会 2003年 「安満山古墳群の調査（3）」『高槻市文化財年報 平成13年度』

# 写 真 图 版





1. 磐手杜古墳群遠景（西から）



2. 安満山上空より三島平野と淀川を望む（北から）



3. 東半部着手前現況（南西から）



4. 東半部着手前現況（西から）



5. 西半部着手前現況（東から）



6. 西半部着手前現況（南東から）



7. 蔵骨器出土状況（西から）



8. 東側石組検出状況（北東から）



9. 石組検出状況（北から）



10. 北壁断面（中央・東側石組付近）（南から）



11



12



13



14

11. 北壁断面（中央）（南から）

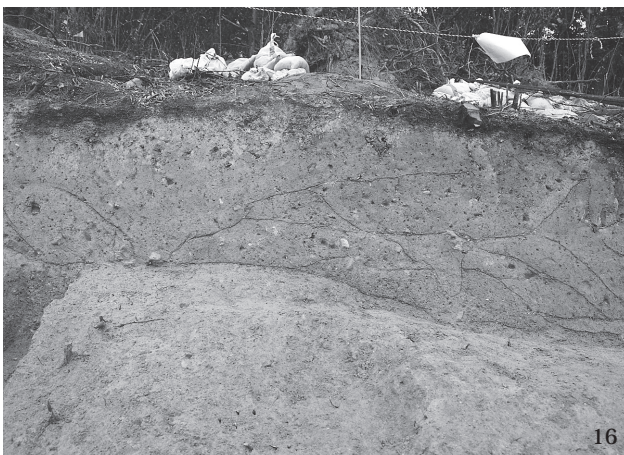
12. 北壁断面（中央・西側石組付近）（南から）

13. 石組全景（西から）

14. 中央部南北断面（西から）



15



16



17



18

15. 北壁断面（西端1）（南から）

16. 北壁断面（西端2）（南から）

17. 北壁断面（東端1）（南から）

18. 西壁断面（東から）



19. 西半部全景（東から）

21. 中央石組付近全景（西から）

20. 東半部全景（西から）

22. 東半部全景（北東から）



1. 灰釉陶器長頸壺（蔵骨器）



2. 須恵器坏身



6. 弥生土器壺底部



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	いわてもりこふんぐん							
書名	磐手杜古墳群							
副書名	近畿自動車名古屋神戸線新設事業（補助車線事業）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（仮称 高槻東道路）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次数								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第263集							
編著者名	金光正裕							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2016年1月31日							
ふりがな	しょざいち	コード		緯度・経度		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いわてもりこふんぐん 磐手杜古墳群	おおさかふ たかつきし 大阪府高槻市 しもちない 下地内	27027	152	北緯	36°00'04"	2014.02.03 ～ 2014.03.31	245	近畿自動車道 名古屋神戸線 新設事業(補助 車線事業)と 主要地方道伏 見柳谷高槻線 バイパス(仮称 高槻東道路) 建設
				東経	139°50'01"			
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
磐手杜古墳群	墓	古墳時代  平安時代		火葬墓		須恵器坏身  灰釉陶器長頸壺		長頸壺の中には 火葬骨を納める
要 約	調査では石組遺構とそれに伴う灰釉陶器長頸壺が発見された。長頸壺の中には火葬骨が納められており、当遺構が平安時代の墓であることが確認された。 また、古墳時代後期の須恵器坏身が出土しており、周辺に当該期の古墳の存在を予想させる。							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第263集

## 磐手杜古墳群

近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（補助車線事業）と  
主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（仮称 高槻東道路）  
事業との同時施行に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2016年1月31日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社

〒630-8141 奈良県奈良市南京終町3丁目464番地